

Title	チャールズ・ブース『ロンドンの民衆の生活と労働』の手稿をめぐって
Sub Title	On manuscripts of Charles Booth's life and labour of the people in London
Author	高井, 哲彦
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1991
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.83, No.4 (1991. 1) ,p.1003(203)- 1017(217)
JaLC DOI	10.14991/001.19910101-0203
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19910101-0203

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



チャールズ・ブース『ロンドンの 民衆の生活と労働』の手稿をめぐって

高井 哲彦

目 次

1. 序 論
2. 『ロンドンの民衆の生活と労働』に関する研究動向
3. チャールズ・ブース・コレクション
4. 産業編ノート
5. ポリス・ノート
6. アサイラム・データと『生活と労働』
7. アサイラム・データにみる被救済貧民の生活—事例—
8. 結 論

1. 序 論

チャールズ・ブースがヴィクトリア朝末期にロンドンの貧困調査を始めてから1989年で100年となった。ブースの『ロンドンの民衆の生活と労働』⁽¹⁾（以下『生活と労働』）は、ロンドンの約30%の人々が貧困状態にあることを統計的に証明し、そして、貧困の原因を個人的な徳性や能力に帰する自由放任的な貧困観に対し、社会経

済的な環境が貧困の原因であると反論した。

近年、新しい視点からチャールズ・ブースの社会調査が検討され始めている。そのひとつは、はじめての科学的な調査と言われてきたブースの貧困調査に主観的な先入観を認める議論であり、もうひとつは、ブースの社会調査を統計調査としてではなく人々の生活の写実的な叙述として再把握しようとする傾向である。⁽²⁾1989年にイギリスのオープン・ユニバーシティで開かれたチャールズ・ブースのコンファレンスの報告もまたこうした新しい方向を示している。

こうした動向の中で、1989年に『生活と労働』の原資料の一部がマイクロフィルム化されて公開されたことの意義は大きい。『生活と労働』の調査がどのような方法論によって行なわれたのか、また、調査結果がどのようにまとめられたのか、を見ることは、ブースの貧困観を考えるために非常に重要である。また、『生活と労働』からもれた多くの叙述的な調査資料は、19世紀末の人々の生活を再構成するために様々な

注(1) Charles Booth, *Life and Labour of the People in London*, 17 vols (First Series: *Poverty*, 4 vols, Second Series: *Industry*, 5 vols, Third Series: *Religious Influences*, 7 vols, Final volume: *Note on Social Influence and Conclusion*), 1902-1904.

(2) R. E. パークの次のような社会調査史把握はこうした傾向の先駆である。「しかしながら、ブースの研究が、人間の本性や社会に関するわれわれの知識に、忘れたくない寄与をした理由は彼の統計にあったのではない。むしろそれは、諸職業階級の現実生活——諸階級が暮らし働く諸条件、彼らの感情、余暇、家庭悲劇、各階級がそれぞれに特有の諸危機に対処する際もっている生活哲学——に関する、彼の写実的な描写にあった。」R. E. Park, "The City as Social Laboratory", in T. V. Smith and L. D. White eds., *Chicago: An Experiment in Social Research*, 1929, 町村敬志・好井裕明訳「社会的実験室としての都市」『実験室としての都市』所収, 1986, p. 18

可能性を提供すると思われる。

本稿では、最初に貧困調査におけるブースの貧困観に関する論争を概観し、次に『生活と労働』の原資料とマイクロフィルム資料の内容を紹介する。そして、最後にマイクロフィルム資料の一部である「アサイラム・データ」を用いて、『生活と労働』を編集した際のブースの意図と貧困観を検討する。

2. 『ロンドンの民衆の生活と労働』 に関する研究動向

論争の発端はジョン・ブラウン(John Brown)の論文だった。彼は、最初の統計的・科学的な貧困分析と認められてきたブースの社会調査が、同時代の道徳的仮説によって形成されていると論じた⁽³⁾。トレヴァー・ルミス(Trevor Lummis)はこれに対して反論し、こうして1971年の*Economic History Review*では、『生活と労働』の社会調査におけるブースの先入観について、2人の間で論争が行われた⁽⁴⁾。

ブラウンによれば、ブース及びウェブ、ベバリッジの欠点は、「政策に対する科学的なアプローチを信じるあまり、彼らが自分の社会調査に持ち込み、得た結果⁽⁵⁾に影響力のあった先入観には気づかなかつた」ことにあった。ブースは、調査で明らかになった広範囲な貧困に対して、臨時的な所得しかない不熟練労働者(階級B)を労働収容所(labour colony)に収容して社会から取り除くという対応策を提案した。この改革計画は、ブース研究者のシミィ夫妻によれ

ば「調査で発見した証拠とはほとんど関係ない⁽⁶⁾先験的な論拠に基づいていた」ものだったが、当時の人々は「調査からの論理的な結論⁽⁷⁾」として受け取った。なぜなら、ブースと当時の人々、そしてブースの後続者たちは、貧困を不熟練労働者個人の性格が原因だと考える「道徳的仮説」を、調査以前に共有していたからである。この貧困観では景気循環の影響は考慮されなかった。

これに対し、トレヴァー・ルミスは、労働収容所という「ブースの雇用に対する提案は、彼の調査から生まれたのであり、道徳的な先入観から生まれたのではない」と反論する⁽⁸⁾。貧困の原因として景気循環が軽視されていたのも、調査が行なわれた1889年は雇用率の高い年で、「ブースとその同時代人は、貧困者が貧乏なのは景気循環より低賃金と不規則な労働のためだと信じていた」ためであり、道徳的仮説のためではなかった⁽⁹⁾。また、ブースの労働収容所の提案がウェブ夫妻(the Webbs)やW. H. ベヴァレッジ(W. H. Beveridge)やD. ドレイジ(G. Drage)などに強い影響を与えたという事実はなく、ブース以降の調査者たちに道徳的仮説は共有されてはいなかったとする。

ブラウンはさらに、階級Bの労働力を無価値と判断したこと、階級Aにおける犯罪、階級Bにおける飲酒、アルコール中毒などに対するブースの叙述の背景には、論理的には説明できない道徳的仮説が存在していると反論する。また、ブースとブースの継承者たちの関係についても、ルミスの解釈はブースの調査をあまりにも他の研究から孤立したものと捉えたとする⁽¹⁰⁾。

注(3) John Brown, "Charles Booth and Labour Colonies, 1889-1905", *Economic History Review*, 2nd ser., vol. 21, 1968, pp. 349-360

(4) Trevor Lummis, "Charles Booth: Moralism or Social Scientist?", *Economic History Review*, 2nd ser., vol. 24, 1971, pp. 100-105; John Brown "Social Judgements and Social Policy", *Economic History Review*, 2nd ser., vol. 24, 1971, pp. 106-113

(5) Brown, *op. cit.*, 1968, p. 350

(6) T. S. Simey & M. B. Simey, *Charles Booth: Social Scientist*, 1960, p. 195

(7) *Ibid.*, pp. 354-355

(8) Lummis, *op. cit.* p. 105

(9) *Ibid.*, p. 103

(10) Brown, *op. cit.*, 1971, p. 111

後に、A. M. マクブライアー (A. M. McBriar) はこの論争を紹介して次のように述べている。ブースの調査は「貧困問題の近代的で統計的・科学的なアプローチのパイオニア」であり、彼自身も「国民全員の非拋出(分担)制の老齢年金の先導的な指導者の一人」だった。しかし、その一方、彼の考えが「貧困は個人の性格における道徳的な欠陥と関係しているという概念から完全にはのがれていない」ように思われることもあった。⁽¹¹⁾

一方、ブースの社会調査やロンドン・ドック・ストライキによって印象づけられてきた1880年代を、「社会理論の分水嶺・社会問題の先行期」とみなす「正統」的な歴史解釈に対しても新たな疑問が生まれた。⁽¹²⁾ ブースの社会調査の結果を1880年代の社会理論として、過去と断続的であると解釈するか連続的であると把握するかという論争は、1971年から1987年にかけて、ガレス・ステッドマン＝ジョーンズ (Gareth Stedman Jones) とE. P. ヘノック (E. P. Hennock) の間で、ステッドマン＝ジョーンズの『見捨てられたロンドン』⁽¹³⁾ (*Outcast London*) をめぐって行われた。ステッドマン＝ジョーンズは、『見捨てられたロンドン』の1971年版において次のように言った。「1880年代中頃のロンドンにおける社会的危機状態によって、臨時雇いの貧民 (casual poor) に対する中流階級の態度は大幅に再編成させられることになった。……臨時雇い

の底辺層 (casual residuum) に対する恐怖心は、1880年代において右翼・左翼の双方が自由放任主義を攻撃し始めるという知的な批判を刺激するのに大きな役割を果たした。⁽¹⁴⁾

これに対してE. P. ヘノックは、ブースが1880年以前の知識人たちと変わらぬ先入観を持っていたとして、「ステッドマン＝ジョーンズは1860年代と1880年代におけるロンドンの経済史については連続性を主張しながら、社会理論の面では同じモデルを採用していない」と批判する。⁽¹⁵⁾ ヘノックは、ブースが貧困を再発見したとする従来の定説に対し、次の2つの疑問を投げかける。第1に、ブースの貧困調査は、ロンドンの民衆の25パーセントが貧困下にあるという社会民主同盟 (S. D. F.) の調査に反論するために始められたと従来から言われてきたが、これは「S. D. F. の失業程度調査と『ペル・メル・ガゼット』 (*Pall Mall Gazette*) による調査をハインドマンが混同した」ことから生じた誤解であると指摘する。⁽¹⁶⁾ そして、第2に、ブースは30パーセントの貧困を発見して驚いたとされてきたが、彼はむしろこの状態を「扇動的な作家たちが私たちに思いこませたほどひどくはない」と受け取ったとする。

ステッドマン＝ジョーンズは、「見捨てられたロンドン」の1984年版の序文において、ヘノックの批判に対して次のように1880年代における社会理論的な断続性を主張している。⁽¹⁷⁾ 第1に、

注 (11) A. M. McBriar, "Charles Booth and the Royal Commission on the Poor Laws, 1905-9", *Historical Studies*, vol. 15, no. 61, 1973, p. 722

(12) E. P. Hennock, "Poverty and Social Theory in England: the experience of the 1880s", *Social History*, vol. 1, 1976, p. 69. Hennock は、正統的な見解の例として、まず、Helen Lynd, *England in the Eighteen-Eighties*, 1945, pp. 17-18 を引用し、最近の研究例として、ステッドマン＝ジョーンズの研究を批判の対象とする。

(13) Gareth Stedman Jones, *Outcast London: a Study in the Relationship between Classes in Victorian Society*, 1971, reprinted with a new preface, 1984

(14) *Ibid.*, pp. 296-297

(15) Hennock, *op. cit.*, p. 90

(16) *Ibid.*, p. 71. この主張は、David Rubinstein, "Booth and Hyndman", *Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, vol. 16, 1968, pp. 22-24 によるものである。

(17) Gareth Stedman Jones, "Preface to the 1984 Edition", *Outcast London*, 1984, p. xx, Demoralization と Degeneralization については同書16章参照。

被救済の原因を快楽主義的な前提におく demoralization の概念が1860年代、1870年代には一般的だったが、1880年代以降、都市環境を貧困状態の原因と考える degeneration の概念にとって代わられたという点で断続的であるとす。第2に、ブースらの提案した労働収容所を擁護し、臨時雇いの底辺層を分離することは1860年代末にはそれほど深刻に考えられなかった政策だったのである。彼が断続性を主張するのはこうした意味であり、「尊敬すべき労働者と臨時雇いの底辺層の間に明確な境界を引く」という貧困観がブースにも残存していることを否定する訳ではない。

ヘノックは、ブースの調査の持つ恣意性と主観性をさらに指摘している。彼は、1889年、1891年出版の貧困編の調査は、家族収入に関して包括的な情報を得ることがなく、学務委員を通じて間接的に情報収集をしたのみであることを指摘し、クララ・コレットの言葉を借りて、ブースの調査は「貧困の程度⁽¹⁸⁾の印象的な統計記録」であったと結論している。

ヘノックらの最近の研究にもとづいた新しいブース解釈については、安保則夫氏が次のようにまとめる。「ブースが行ったことは、スラムという特定の形態、あるいはそれにまつわる特殊なイメージにおいてではなく（ただし、そのイメージを完全に排除したわけではないが）、統計的に裏付けされた「階級関係」の分析を通して、「さまざまな階層からなる雑多な相対的過剰人口を内包する労働者階級をいかにして社会的に再配置＝再編成するか」という「戦略課題をよ

⁽¹⁹⁾り鮮明な形で提起したことであった」。

3. チャールズ・ブース・コレクション

ブースが収集したデータは、『生活と労働』の手稿ともに *The Charles Booth Collection*（以下コレクション）として、ロンドン大学政治経済学部 London School of Economics の英国政治経済学図書館 British Library of Political and Economic Science に保管されている。*Life and Labour of the People of London* (Harvester Press Microform Publications LTD., 1988)（以下マイクロフィルム）は、このコレクションのうち第2編（産業編）の資料を中心に複写したものである。⁽²⁰⁾

まず、コレクションの全体構成を述べたい。コレクション全体は484部で、A資料58部、B資料392部、C資料25部、D資料9部⁽²¹⁾によって構成される。

A資料は、調査に使用した注釈や質問表、統計表、地図などのノート・メモ類を、『生活と労働』の構成にしたがって整理し、冊子形に綴じ直した資料群である。そして、B資料は、調査の記録と原稿の執筆のために実際に使用されたノートである。ノートはA資料と同様『生活と労働』の構成に準じて資料ボックスに整理されている。A資料とB資料は対となって整理されている。一方、C資料とD資料は、このA資料・B資料の整理時にはコレクションから欠落していた資料であり、整理された順に1925年以

注(18) E. P. Hennock, "The Measurement of Urban Poverty: from the Metropolis to the Nation, 1880-1920", *Economic History Review*, 2nd ser., vol. 40, 1987, p. 208. 引用は, Clara E. Collet, "Some Recollections of Charles Booth", *The Social Service Review*, vol. 1, no. 3, 1927, p. 384 より。

(19) 安保則夫「貧困の発見——チャールズ・ブースのロンドン調査をめぐって——」, 関西学院大学『経済学論究』, vol. 41, no. 3, 1987, p. 78. また、ブースに関する他の邦語論文としては、安保則夫「イギリスにおける貧困認識の旋回——『ロンドンの見捨てられた人びとの悲痛な叫び』をめぐって——」『経済学論究』, vol. 41, no. 2, 1987, 石田忠「チャールズ・ブースのロンドン調査について」, 一橋大学『社会学研究』, vol. 2, 1959, 「チャールズ・ブース研究——英国社会調査史研究・序説——」, 『社会学研究』 vol. 4, 1962 がある。

降に追加されている。

次にそれぞれの資料の内容を述べる。⁽²²⁾

A資料は、総索引1冊、貧困編資料1冊、産業編資料28冊、宗教的影響編資料28冊から構成される。⁽²³⁾ A資料としては貧困編資料は少なく、イースト・ロンドンの職業について、リストとインタビューが1冊だけ集められている。産業編資料としては、会社リスト、雇用者・労働

者へのインタビュー、会社に対する質問表、集計結果の統計、レポート等がファイルされている。⁽²⁴⁾ 宗教的影響編資料では、ブースの作成したリスト、ブースの覚え書き、ブースの「調査助手」によるレポート、地図が『生活と労働』の章ごとに整理されている。⁽²⁵⁾ 産業編資料28冊については、マイクロフィルムの複写が公刊されている。⁽²⁶⁾

B資料は、貧困編資料81冊と産業編資料87冊、

注(20) コレクションには、『生活と労働』の資料以外にも、ロンドン統計学会でブースが発表した論文(1886年5月, 1887年, 1888年)の資料が含まれている。このコレクション以外にも『生活と労働』のマニュスクリプトが存在していることには留意する必要がある。それはリヴァプール大学の特別収集部(Special Collection Department)の所蔵する資料で、1948年にブースの家族から同大学に寄贈されたものである。National Registrar of Archiveの索引によれば、校正刷り、地図、その他を集めた筆写原稿・タイプ原稿であり、記録ノート・調査資料類で構成されるコレクションとは種類が異なるようである。また、ブースの書簡としては次の3点が残されている。第1に、“1831-81: MS of Figures from Census Returns,” Occupations of the People, England and Wales, Scotland, Ireland-1831 to 1881”(個人蔵)。第2に、“1870-1916: Correspondances and Papers”(ロンドン大学図書館所蔵)。これは、チャールズ・ブースとその家族(妻 Mary Cathrine Booth など)とマコーレイ家の1799年から1967年の書簡である。a) マコーレイ書簡, b) ブース書簡(1000通)の2部に分かれる。これには、ブースの伝記の著者であるシミィ夫妻、ノーマン・パトラー夫人などの書簡も含まれる。第3に、“Letters to H. Samuel: 1888-95”(上院議院資料館 House of Lords RO 所蔵)がある。

- (21) 著者が調査した1989年3月の時点では、1984年以降新しい資料は発見されていないが、新しい資料が発見されれば構成は変化しうる。
- (22) ここで述べるコレクションの分類と『生活と労働』との対応関係は、コレクションの総目(A1)の分類に準ずる。整理記号は、それがA資料ならば頭にAが記され、その後資料1単位ごとの整理番号が付けられている。
- (23) 『生活と労働』の貧困編に対応する資料は、A資料の中ではA2のみ。これは貧困編第4巻第3章 The Tailoring Trade, 第6巻 The Furniture Trades, 第7巻 Tobacco Workers に対応する。産業編資料については、産業編第1巻(A3-9), 第2巻(A10-18), 第3巻(A19-25), 第4巻(A26-30)と整理されている。宗教的影響編に関しては、宗教的影響全体に関する資料(手紙など)(A31), 宗教的影響編第1巻(A32-38), 第2巻(A38-41), 第3巻(A41-44), 第4巻(A44-47), 第5巻(A47-51), 第6巻(A51-54), 最終巻(A55-56), そして, subject index (A57), Album of press notices (A58) という構成になっている。
- (24) 産業編資料については、完全に欠落している章は比較的少ない。章ごと欠落しているのは、巻(volume)一部(part)一章(chapter)で表すと以下の章。Dealers and Clerks: 3-3-1; Locomotion, & c: 3-4-1, 3-4-2; The “Unoccupied” Classes: 4-3; Comparisons: 5-1; Survey and Conclusions: 5-2-1, 5-2-2, 5-2-3, 5-2-4, 5-2-5, 5-2-8, 5-2-9, 5-2-11, 5-2-12, 5-2-13。また, The Building Trades: 1-1-1, 1-1-2, 1-1-3, 1-1-4, 1-1-5, そして, Metal Workers: 1-3-2, 1-3-3 については、資料は存在するが章単位に整理されていない。産業編では、章に分類できない資料は部ごとに General と分類されることもある。
- (25) 宗教的影響編に関連する資料において章ごと欠落しているものはほとんどなく、欠落した章は各地域の Illustrations のみである。
- (26) A3-30 が, Havester Press Microform Publications Ltd. によってマイクロフィルム化され, *Life and Labour of the People of London* (1988) の part 2 として収められている (Reel 20-26)。

宗教的影響編資料77冊、最終巻・宗教的影響編資料47冊から構成される。⁽²⁷⁾学務委員会訪問員のノート(1886-1889)66冊、家庭訪問(1889, 1890)のノート4冊は、貧困編において貧困分析の拠り所とされた重要な資料である。産業編資料としては、主に労働状態に関するインタビュー記録が、『生活と労働』産業編の職業分類に対応して整理されている。⁽²⁸⁾これらは、後述の産業に関するインタビュー・ノートと、アサイラム・データとして、マイクロフィルムに複写されている。宗教的影響編については、調査記録が教区ごとにまとめられている。⁽²⁹⁾最終巻・宗教的影響編資料は、ブースの助手ジョージ・ダックワースによる巡査とその巡回区域の様子に関するノート31冊と、地方公共団体についての資料16冊に区分される。前者は後で述べるポリス・ノートとしてマイクロフィルム化されている。

C資料は、1925年に整理、追加された資料であり、宗教的影響編資料としてA資料・B資料に追加されるべき資料19部と、未整理資料6部

によって構成されている。⁽³⁰⁾資料には書類とノートの双方があり、地区または産業によって整理されて、資料ボックスに収められている。

D資料は、1978年、1981年、1984年に貴重図書室で発見された資料群である。1978年に発見された資料5箱は、ダックワースのポリス・ノートに関するものである。⁽³¹⁾1981年に発見された2箱の資料のうち、ひとつはロンドンの産業に関する資料、もうひとつはOuter Londonの産業に関する資料である。⁽³²⁾また、1984年に発見された資料は、1831—1881年の国勢調査からブースが計算したイングランド、ウェールズ、スコットランドの職業ごとの雇用数の統計と、ロンドンの各カウンティの統計である。⁽³³⁾

マイクロフィルムに複写されているのは、このコレクションの以上の484部のうち、3割弱にあたる147部である。マイクロフィルムは第1部19リールと第2部7リールの合計26リールによって構成される。収録されている資料をコレクションの分類と整理記号でいえば、貧困編

注(27) 貧困編の資料は、学務委員会訪問員のノート1(B1-7)、同ノート2(B8-57)、同ノート3(B58-64)、同ノート4(B65)、特別なインタビューの記載された同ノート5(B66-76)、1889, 1890年の訪問調査のときの4冊のノート(B77-80)、そして、家具製作業に関するノート[1888年](B81)という構成になっている。産業編資料については、第1巻(B82-89)、第2巻(B90-107)、第3巻(B108-146)、第4巻(B147-168)、という形で『生活と労働』に対応する。宗教的影響編と資料との対応は、第1巻(B169-220)、第2巻(B221-245)、第3巻(B246-268)、第4巻(B269-283)、第5巻(B284-302)、第6巻(B302-315)、第7巻(B316-345)という形である。最終巻・宗教的影響資料としては、ジョージ・ダックワースのポリス・ノート(B346-376)、地方公共団体に関する資料(B316-345)という構成である。この資料は『生活と労働』での対応箇所が明確には特定できない。

(28) 産業編資料において章が欠落しているのは、巻一部一章で示すと、The Building Trades: 1-1; Carriage Builders: 1-2-2; Metal Workers: 1-3-1, 1-3-2, 1-3-3; Jewellers, Gold and Silversmiths & Musical Instruments and Toys: 2-1-1, 2-1-4; Hemp, Jute and Fibre: 2-4-3; Hatters: 3-1-2; Food and Drink: 3-1-2, 3-3-1, 3-3-2, 3-4-1, 3-4-4; The "unoccupied" Classes: 4-3, Inmates of Institutions, & c (Occupations): 4-4-1。

(29) 宗教的影響資料から欠落している章は Bethnal Green, Haggerson, & c: 2-2。と各地域の Illustrations である。

(30) 1925年にチャールス・ブースの子息 T. M. ブースによって作成された資料の目録では、資料は C1-10 と、C11-19 および A-F の2つに分類されている。後者のうち A-F が未整理資料である。

(31) 地区ごとの資料で、Districts 2-13 (D1), Districts 15-26 (D2), Districts 27-35 (D3), Districts 37-38 (D4) と整理されている。D5は、家賃などに関する資料。ブースが注釈を加えている。

(32) 順に D6, D7 という整理番号を持つ。D6-9は、産業編の資料と推定されるが、具体的に『生活と労働』のどこで使用されているかは、未確認である。

(33) 順に D8, D9 という整理記号が付けられている。

の家具製作業に関するノート1冊(B81)⁽³⁴⁾、最近発見された資料(D6-9)を除く産業編資料115冊すべて(B82-168, A3-30)、そして、主に最終巻・宗教的影響編に対応するダックワースのポリス・ノート31冊(B346-376)となる。

逆にマイクロフィルムに収録されていない資料は、A3をのぞくすべての貧困編資料81冊(A2, B1-80)、1978年以降に発見された産業編資料4箱(D6-9)、すべての宗教的影響編資料224部(A31-58, B169-345, C1-19)、一部の最終巻・宗教的影響編資料21部(B377-92, D1-5)、その他7冊(A1, C:A-F)である。

以上から分かるように、このマイクロフィルムでは、『生活と労働』の資料の中でも貧困編と宗教的影響編に該当するほとんどの資料を割愛する代わりに、産業編に関連するすべての資料とポリス・ノートを収録している⁽³⁵⁾。

マイクロフィルム資料は、その内容によって3つに分けられる。第1に産業に関するインタビュー・ノート(B81-161, A3-30)、第2にアサイラム・データ(B162-168)、第3にポリス・ノート(B346-376)である。以下にそれぞれの資料の内容を述べる。

4. 産業編ノート

産業編ノートは、『生活と労働』の産業編の中心的な資料である。まず、『生活と労働』の中での産業編の位置づけを述べてから、産業編ノートの内容を紹介したい。

『生活と労働』は、貧困編、産業編、宗教的

影響編の3編によって構成されている。産業編は、貧困編と比べてより大部で新しい調査であったのに関わらず、研究者によって論及される機会が少なかった。こうした傾向を、M. J. カレン(M. J. Cullen)の失業研究は、産業編は「あまりにもしばしば安易に失敗作として忘れられてきた⁽³⁶⁾」と問題提起している。

『生活と労働』では、「まず地区によって、それから職業によって人々を分類し、その生活と仕事の様式を一度に明らかにする⁽³⁷⁾」ことが調査の当初から計画されていた。この「2重の方法(double method)」と呼ばれる方法にしたがい、貧困編において地域調査により人々の貧困状態を描き、そして、産業編で職業調査により産業別の労働条件を明かにして、そこから生活と職業の相関を導くことが試みられた。だが、結局、産業編の調査からは包括的な結論を導くことがなく、当初の目的は果たされぬまま終わった。産業編が「失敗作」と言われてきたのは、このためである。

しかし、産業編はブースが意図した以上に多様な分析の可能性のある資料である。調査にあたり、1891年のセンサスによる職業別の統計データ(性別・年齢別の雇用数、世帯主数と他の家族構成員の人数、ロンドン出身の世帯主の人数、部屋数または使用人数によって示される世帯主の社会的地位)が、基礎資料として戸籍本署長官により与えられている。ブースは調査助手たちとともに、この1891年センサスの89の職業分類に沿って、会社・工場へのインタビューと質問表によって調査を行い、『生活と労働』の中でセンサ

注(34) 貧困編第4巻“The Trades of East London Connected with Poverty”第6章“The Furniture Trade”の資料と思われる。しかし、第6章の家具業に関するB資料(B81)はマイクロフィルムに収録されているが、同巻の第3章・第6章・第9章のA資料(A2)は収録されていない。

(35) ダックワースのポリス・ノートにおける産業に関する記述について、ケヴィン・ペイルス(Kevin Bales)は、マイクロフィルムのIntroductionにおいて、ダックワースは「『地域的な中小産業(micro-economy of neighbourhood)』とでもいうべきものに、特に関心を持っている。」(p.14)と述べ、産業編資料としての性格を強調している。

(36) M. J. Cullen, “The 1887 Survey of the London Working Class”, *International Review of Social History*, vol. 20, no. 1, 1975, p. 49.

(37) *Life and Labour, Poverty*, vol. 1, p. 3

スによる統計データ図表と組み合わせて、職業別の労働状況を叙述的にまとめた。これは、当時の各産業の雇用・労働状態を具体的に知るための第1級の資料となっている。また、89に分類される職業の他に、施設に収容されている人々についての叙述もある。これには、病院、救貧院、監獄、兵舎、ホテル、簡易宿泊所、船に収容されている人々と住み込みの使用人が含まれる。この中の救貧院収容者等の最底辺の人々の描写は、19世紀末の貧困状況と救貧法による貧困救済のあり方を知る上で重要である。

マイクロフィルムには、産業編全5巻に関するコレクションの現存資料がすべて複製されている。ここでは、仮に89の職業についての資料を「産業編ノート」、施設収容者についての資料を「アサイラム・データ」(後述)と呼ぶことにする。

さて、産業編ノートの具体的な内容について説明しよう。

産業編ノートとしては、マイクロフィルム第1部としてリール第1巻から第11巻の半ばに、ノート81冊(B81-161)の聞き取り調査記録が収められている。雇用契約、労働時間、賃金率、生産額、労働災害例、労働組合、労働過程、物価、職歴についてのインタビュー記録が、職業別に分類して手書きで記録されている。調査の相手は、主として経営者、労働組合幹部、労働者個人である。また、第2部としてリール第20巻から第30巻に、質問表、インタビュー、賃金表、その他レポートなどを綴じ込んだ資料集28冊(A3-30)が複製されている。『生活と労働』の産業分類にしたがって、同じ章構成でまとめられている。

調査にあたっては、まず、会社と労働組合の名前を、工場監督官(factory inspector)のノー

トと会社住所録などによって調べ、それらに質問表を送付し、正確な雇用数、それが男か女か子供か(通常の時、良好なとき、最大限と最小限の週の)それぞれの賃金を調べた。質問表は、不振な週は黒、多忙な週は赤で記入されている。

さらに調査の協力が得られる場合は、調査員がその会社に出向き、聞き取り調査を行った。その際、労働時間、残業、規則性・不規則性、季節的な労働パターン、研修方法、技術の必要性、病気のリスト、労働災害、住居などが記録された。また、病院など特殊な産業には別の形式の質問表が用意された。

聞き取り調査は労働組合に対しても行われた。労働組合の支部書記に対して、その組合の役割とその歴史が質問された。見本の契約(sample contract)、パンフレットなども集められ、ノートに張り付けられている。組合に対し協力を拒否した会社についての情報もある。聞き取り調査と情報収集に際し、組合職員は1時間1シリングから4シリングの謝礼を支払われたようである。労働者個人に対しても聞き取り調査は行われ、職歴、逸話、生産物の素描、生産の過程、⁽³⁸⁾店や工場の配置、などが記録されている。

5. ポリス・ノート

ブースの助手、ジョージ・ダックワースが巡査の案内でロンドンのすべての巡回区域を歩きながら、巡査の話と自分の観察により人々の生活状態を書き記した20冊のノートである。この調査資料は、『生活と労働』の中で包括的にまとめられることのなかった未公開資料である。産業編の「警官と獄吏」と宗教的影響編の「警官、飲酒、無秩序」という項目でわずかに利用されているが、⁽³⁹⁾これは警察官の職務を叙述する

(38) Kevin Bales, "Introduction to the Microfilm Edition", *Life and Labour of the People of London* (Harvester Microform), Reel 1, pp.1-4

(39) *Life and Labour*, Industry, vol. 4, pp.46-56, Religious Influences, vol. 1, pp.52-55. Bales の指摘による。Introduction, p.11

ために使われただけであって、地域調査という調査本来の意図とは異なる。そういう意味で、今回複製された資料群には多様な分析の可能性が残されている。

ポリス・ノートには、メモの他に地図や図やインタビューが、ダックワースの荒い筆跡で記述されている。小売り店の物価、家賃、家内工業の詳細、エスニックグループとその状態、貧困の状態、地域の中小工場(micro-industries)などについて、通りごとに不規則に記録されている。

ノートは、1冊250ページであり、右側にのみ記録が書かれ、左側は注釈、簡単なスケッチ、地図などのためにあけてある。記録では、観察日時と、巡回地域・歩いた順路の概要、そして同伴した巡査の名前が冒頭に記される。そして、巡回の道順を克明に記しながら、ブースが貧困編で地区に与えた貧困の程度と比較し、同じ貧困地図の分類を用いて大ざっぱに、街区ごとの現在の経済状態を記録している。この時期にはスラムの解体、道路の整備などが行われたため、道路整備等による環境の変化についても描かれている。

家賃、小売り店の物価や、家庭の貧困状態が描写されている。警官と同伴していたためもあり、冥加金の徴収や売春など逸脱行為や犯罪の記録もある。数ブロックほどの小さな地域に集中する手細工や家内工業の中小工場についても記されている。パブの主人とインタビューをしたときは、常連客のこと、経営、その他逸話などが記録されている⁽⁴⁰⁾。

このノートの第1の特徴は、ロンドン全域にわたった網羅的な調査記録であることである。この調査は、6年前の貧困編の調査で作成した貧困分布地図との比較・確認・修正が目的の一つであった。この記録により、時間的な変化や、この時期の経済・生活状態の地域的な違いやそ

の分布を見ることができる。

第2の特徴は、調査者自身が実際にスラムや街路を歩き観察したフィールド・ワークの記録であるということである。ロンドンの貧困状態を明らかにした貧困編の調査は、主に学務委員の記録と学務委員に対するインタビューを通して行われた、間接的な調査であった。これに対し、ポリス・ノートは、巡査の同伴という限定はつくものの、ダックワース自らが街路を歩き観察しインタビューを行った記録である。

他方、ダックワースの調査については次のような問題点が指摘されるだろう。

調査が巡査の案内と説明によるものである限り、調査から得られる情報は巡査の意図から中立的なものではありえない。また、インタビューの対象としたパブの主人や地域の住民についても、巡査を傍らにして完全に率直な答えを期待して良いかどうか疑問が残る。ただし、巡査の態度と説明については、ダックワースも「ウェイト巡査を見れば見るほど、彼は本当のことをすべてまず話してくれそうもないと確信されてくる」と、疑問を記している⁽⁴¹⁾。

6. アサイラム・データと『生活と労働』

アサイラム・データは、1889年4月30日にステフニィ(Stepney)で救済を受け取った1,325人の被救済貧民(pauper)についての救済官の記録を、ブースの助手ジョージ・アークル(George Arkell)が複写したものである。

『生活と労働』産業編の第4巻第4部「諸施設の収容者など」⁽⁴³⁾では、この資料によって被救済的窮乏(pauperism)の原因が統計的に集計され、窮乏の状態が事例により描写された。また、ブースが老齢年金を提唱する端緒となった王立統計協会(Royal Statistical Society)での報告も、このステフニィでの統計において被救済的窮乏

注(40) *Ibid.*, pp. 10-11

(41) Bales がコレクションから引用したもの。 *ibid.*, p. 10

(42) 救貧官のノートその筆写録であるアサイラム・データとの間の厳密な相違は分かっていない。

の原因のうち老齢が32.8%を占めたことを論拠⁽⁴⁴⁾としている。

この章では、まず、『生活と労働』におけるアサイラム・データの位置と扱いを確認し、次の章でアサイラム・データの内容を紹介したい。

第1章「職業」では、センサスの職業人口データから、各職業人口に対する救貧法施設収容者の率が職業毎に算出されている⁽⁴⁵⁾。この職業毎の収容率は、職業と困窮の相関を示している。特に針子・ミシン工など(8.6%)の収容率が高いのはその産業の停滞が理由であり、また、街頭商人(7.4%)や雑役・洗濯・整髪(5.6%)の収容率が高いのは、その職業がそれぞれ心身に支障のある不熟練労働者や未亡人の就業する職業だからだとブースは説明している。そして彼は最後に、各職業における被救済的窮乏者の比率は、その職業における貧困者の比率と比例しているという結論を導く。すなわち、貧困線以下の階級の比率が少ない職業ほど救貧院等に収容される確率が少なく、「60%の貧困者がいれば4%の収容者、40-50%(の貧困者)に対し2-3%(の収容者)、25-30%に対し1.5-2%、20%に対し1%」⁽⁴⁶⁾という対応関係があるとするのである。

一方、アサイラム・データについては、第2章「ステフニにおける窮乏(pauperism)」で、ステフニの救貧院とシック・アサイラムに入所した人々⁽⁴⁷⁾に対し、窮乏の原因が統計的に集計されている。それによれば、窮乏の第一の原因は、多い順に、老齢が32.8%、病気が26.7%、

飯酒が12.6%となった。これは、職業と窮乏の相関を示した「職業」の集計とともに、酒と怠惰を窮乏の原因と考えていた従来の貧困観を統計的に否定するものである。

しかし、ブース「母集団の大きさが不十分である⁽⁴⁸⁾」と考え、それ以上統計結果を一般化して強調することは避けた。そして、その代わりに、「代表的」と思われる個人史を選び出し、「窮乏の状態と同様に貧民の習慣を説明する」実例として描いた。第3章「窮乏の状態(窮乏環境の事例となる12の個人史)」と第4章「窮乏の状態(窮乏の原因を例証する50の個人史)」がその実例であり、付録B「ステフニの被救済的困窮」にはアサイラム・データ記載者のリストが要約されている。

以上のブースによる窮乏の分析には次のような問題が指摘されるだろう。

第1に、「職業」の統計では、職業は施設に収容される直前の職業で分類されており、経済・身体・家庭の条件による職業の変化が考えられていない。特に行商、針子・雑役婦などは他に職のない者が就く職業であるため、救済される直前の人々にこの職業が多いのは当然のことである。窮乏の原因を知るために重要なのは、むしろ職業の遍歴である。

第2に、窮乏の原因については、原因を判断する基準が問題となる。ブースは「自分のしたことは、(彼らの)経験する問題の原因と思われるもの⁽⁴⁹⁾を指摘する記号を各事例につけただけである」と述べているが、いかなる基準で原因

注(43) *Life and Labour, Industry*, vol. 4, pp. 301-380

(44) Charles Booth, "Enumeration and Classification of Paupers, and State Pensions for the Aged", *Journal of the Royal Statistical Society*, vol. 54, 1891, p. 609. これ以降の老齢年金に関するブースの著作としては次のようなものがある。 *Pauperism, a Picture and Endowment of Old Age, an Argument*, 1892; "Statistics of Pauperism in Old Age", *Journal of the Royal Statistical Society*, vol. 57, 1894; *The Aged Poor in England and Wales: Condition*, 1899; *Old Age Pensions and the Aged poor: A Proposal*, 1899

(45) *Life and Labour, Industry*, vol. 4, p. 303

(46) *Ibid.*, pp. 305-306

(47) *Ibid.*, p. 314

(48) *Ibid.*, p. 316

(49) *Ibid.*, p. 379

を判断したのか明らかにしていない。また、事例についても、ブースがその事例を叙述した意図は論及されていない。

したがって、貧困者が救貧院に收容されるに至る複合的な背景を理解するためにも、『生活と労働』におけるブースの窮乏把握・貧困観を明らかにするためにも、アサイラム・データをみなおす必要がある。

7. アサイラム・データにみる 被救済貧民の生活 一事例一

アサイラム・データの対象であるステフニィ教区連合 (Stepney Union) は、ライムハウス (Limehouse) 教区、シャドウェル (Shadwell) 教区、ワッピング (Wapping) 教区、そしてラトクリフ村 (the hamlet of Ratcliff) によって構成される462エーカーの地域である。救貧法による救済は、ライムハウスを第1地区、ラトクリフ、ワッピング、シャドウェルを第2地区に区分して、それぞれ別の救貧官が担当した。

この地域の住民は、ロンドン・ドックとグラウンド・ユニオン運河のライムハウス港で働く者が多いことが特徴である。「波止場と近くのドックが人々の主要な雇用先であり、小売り店主やある種の専門家⁽⁵⁰⁾を除けば、ほとんどが労働者階級だった」。ラトクリフは、アイルランド移民の居住区であり、普通そこの男性は港湾で働き、女性はローブ製造業と鉛加工業で働いていた。

ノートの内容は定型的であり、事例番号、名前、年齢、施設、住所、婚姻関係 (寡婦、孤児、既婚など)、職業、窮乏の原因、親戚関係 (名前、続柄、住所) が箇条書きに記されている。

窮乏の原因は記号によって表され、この記号はAからZまで26個ある。順に、失業または仕事の不規則性、低賃金、能力不足、飲酒、浪費、扶養家族の負担、早婚、遺伝、病気、不道德、

犯罪、怠惰、精神障害、身寄りがない、両親の死亡・孤児、窮乏が原因となった窮乏、気性、むこうみず (recklessness)、環境、労働条件、不健康な職業、扶養の放棄 (desertion)、夫の死亡、事故、不運、老齢⁽⁵¹⁾である。主要な原因だと思われる場合は大文字の記号で、付加的原因は小文字で記される。

最後に、職歴、救貧の理由、救貧申請の経緯、救貧の日時と期間、被救済貧民の生活状態、などが救済官によって記録されている。これらのデータは、被救済貧民の1人当たり1ページから2ページずつ記入されている。

以下の收容者は、第1地区 (ライムハウス) の救済官に申請し、ポプラー救貧院に收容されている人々を、ノート (B163) の記載順に叙述したものである。

Eliza Astridge (56歳, 1878年より未亡人, 無職, 独立した23歳の娘がいる) は、飲酒が窮乏の原因と判断される。1884年6月にポプラーからステフニィに移された。2人目の夫が1878年に死亡してから18ヶ月間夫の経営していたライムハウスの店をやっていた。不自由な足のためそれが続けられなくなり、20ポンドで店を売却し、8ポンドの負債を埋め合わせたといい。しかし、近所の小売り店主は、彼女は酒びたりだったという。彼女は過去4年間ほとんど、ポプラーのシック・アサイラムと救貧院にいた。また、ノース・ストリーの店主は、彼女は酒で仕事を失敗したという。彼女は本当に大酒飲みだったのである。86年8月30日に再び (ポプラーに) 移されてきた。87年2月21日に妹夫婦の家に一晚泊まった後に入所を申請した。88年4月に友達と会うために出所し、外に泊まる。再申請したときポプラーを希望し、89年3月22日にステフニィに移される。(no. 301, p. 480)

Jesse James Burdett (65歳, 1881年より寡夫,

注 (50) *Ibid.*, p. 311

(51) アサイラム・データ, p. 1

港湾労働者)は、2人目の妻は1881年に58歳で死亡、妻の子供は82年に29歳で死亡。義理の息子がいる。

彼は1881年4月13日に妻をシック・アサイラムに入所させることを申請した。彼女は3週間水腫で苦しみ、医者 の指示する薬類を買うことができなかつた。救済官が住居を訪問し病状と窮乏を確認した。COSはそれまで2シリング6ペンスを支給していた。その翌日、彼は妻が朝方死亡したことを報告しに来た。埋葬したいが職がないため費用がないという。

1883年1月10日に救貧院に申請したときもクリスマスの2週間前から職がないと言っている。救済官は彼の部屋を訪問し、彼が家にいるのを確認した。その住居には別の男がいて彼に週9シリングの家賃を払っていた。ポプラーへの入所が認められた。

2月に出所し、行商をするが、認可を持っていないため締め出されることを恐れていた。7月に再入所した。83年8月に行商に行くためにチョコキを給付され、83年10月10日に再入所するまで戻らなかつた。84年2月に1日だけ出所し、再入所した。同年5月に出所し、装飾品を売りに地方に行ったが、88年7月15日に再入所した。(no. 302, pp. 481-482)

Maria Birchfield(59歳, 1871年から寡婦, ゴミ運搬人ほか)は、78年12月に医療を申請した。息子(44歳)は、妻を亡くし、20歳, 18歳, 16歳, 14歳, 11歳の子供を抱える。娘(36歳)には煉瓦工場で働く夫がいる。他の親戚としては妹がいる。

1878年12月4日、医療の手当を申し込んだ。濡れたところで働いてきたため発作を持っていた。79年1月14日、彼女がずっと床にふせっていて家を出ることもできないとメアリ・ウィリスが報告しに来たため、シック・アサイラムへの入院を認められる。リージェント・コートに1シリング6ペンスの家賃の部屋を借りていて、それ以前はイーストフィールド・ストリートに

24年間住んでいた。83年6月に彼女は医療手当を受けた。アップottsのゴミ置き場で働き、5シリングから6シリングの週給をもらっていた。84年7月、85年1月には薬も給付されており、85年4月にはシック・アサイラムに入所が認められる。そのとき救済官補佐は彼女を訪れて「大変汚い状態」にあると報告した。

次の申請は1888年9月11日だった。息子の嫁の葬式に出るため5日間ポプラー救貧院を出て娘の家に泊まった。85年5月にシック・アサイラムを出て、ヒル夫人のところで1年間暮らした。その後プロムレイ救貧院に2年いて、娘の家に数日泊まった後に、ポプラー救貧院に送られてきた。入所は再許可され、89年6月5日まで収容された。仕事につけるよう衣服を要請したがこの申請は拒否された。(no. 303, pp. 483-484)

Mary Elizabeth Carry(55歳, 独身, 雑役使用人)は精神薄弱が原因でポプラー救貧院に在籍。親戚には、姉(妹)、兄(または弟、シック・アサイラムにて89年4月死亡)、その妻(現在プロムレイ救貧院に在籍)がいる。

最初の申請は75年12月に姉(妹)が彼女の頭を少しおかしいと言ってきたものである。彼女が外出したのは、78年6月20日、79年12月18日、80年4月30日、81年10月13日、83年2月8日、84年3月13日、84年7月10日、84年12月4日、85年5月14日、85年10月15日、そして87年6月9日である。どの場合も1日外に出て、次の日にまた戻った。88年1月にシック・アサイラムに入れられ、その後、2回ポプラー救貧院を出た。最近の出所は89年の3月28日である。仕事を探すためにときどき1日外に出ることを許可されていた。(NO. 304, p. 485)

Caroline Collier(63歳, 1862年から未亡人, 女中など)は、飲酒と夫の死亡のため、ポプラー救貧院に現在収容されている。彼女には、港湾労働者の兄(弟)と姉(妹)が二人いる。姉(妹)

のホワイトは精神病院にいる。

船員だった夫が1862年に死亡してから、洗濯で生計をたてていた。ホワイトチャペルから送られて、2年8ヶ月プロムレイ救貧院にいた。81年5月に救貧院を出て、自分の姉(妹)の女中として働くが、82年3月22日にケンカしてそこを出て行った。その夜は浮浪者一時収容室に泊まり、3月23日にポプラー救貧院に送られた。84年8月に行商のために衣服を要請したが却下された。彼女は酔って再入所を申請したが、拒否された。浮浪者一時収容室に4泊した後、入所を認められた。85年8月に一日外に出た。86年6月、「気分転換のために外出」し、深酒をして、転んで顔を傷つけた。4日間外にいてから、86年6月16日に収容を認められた。(No. 305, p. 486)

Samuel Clissold (58歳, 独身, パン屋)は失業と不具のため、ポプラー救貧院に収容されている。妹(45歳)はケンジントンで働いている。

85年4月4日にポプラー救貧院に収容申請をした。彼は長年セント・パンクラス(St. Pancras)救貧院を出たり入ったりしていた。彼は1885年7月に出所して、スローソン氏(パン屋)のところで働いた。当初週給12シリングで、後に週給18シリングに昇給した。スローソン氏がそれ以上昇給しようとしなかったのが、彼は11週間前に彼のところを去った。ネスビッツ・レンツに下宿していたので、セント・パンクラスに救済を申請したが、ステフニィに送られてきた。スローソン氏は彼のことをほめはしたが、あまり強健でないと。ポプラー救貧院への入所を認められた。

85年7月に出所して、週給16シリングでスローソン氏にまた雇われたが、87年3月に親指を膿ませて3週間仕事ができなくなり、ポプラー救貧院に戻ってきた。87年5月にシック・アサイラムから退院し、プロムレイ救貧院に入所が認められた。彼の手は不自由になっていた。87年7月に1ヶ月、8月に1晩外に出たが、手の

せいでパン屋の職にはつげなかった。1888年に5回外に出たが仕事はなかった。パン屋には彼にパンを恵む者もいて、彼はあちこちの浮浪者一時収容室に泊まったり、通りを放浪したりした。最近の入所は、1889年4月25日である。(No. 306, pp. 487-488)

Joseph Clear (50歳, 寡夫, 港湾労働者・船員)は、失業のためポプラー救貧院に収容されている。親戚はいない。

「有色人」であり、バハマのニュー・プロヴィデンスのナッサン出身で、彼の父親は船員だったという。1854年にイギリスに来た。それ以来さまざまな海を航海し、アメリカにも行ったが、「銃を打ち合い、あまりにもナイフを振るう」のでアメリカ人を好きになれなかったという。88年2月にプロイセンからイギリスに来てから船に乗れなくなった。この申請は88年5月10日になされた。それまでの5週間、夕食とベッドに3シリング払って救世軍の宿泊施設に泊まっていた。入所が認められ、現在もポプラー救貧院にいる。(No. 307, p. 489)

Patrick Donovan (58歳, 独身, 一般労働者)は、飲酒のため、ポプラー救貧院に収容。姉(妹)が1人いる。救貧官は「私は長い間この男を知っているが、いつも救貧を受けるほど貧乏だった。」と記している。彼の収入はラトクリフにあるドリスコール夫人の PAP「三つの大樽」へ注ぎ込まれていたのである。

78年2月4日に入所を申請した。フェニックス・アパート(chambers)に泊まっていた、数カ月働いていなかった。足が悪く、そのために以前シック・アサイラムにいたことがあった。かつてガーデン・プレイスのスリヴァン夫人のところに入った。この入所申請は認められた。

2度目に申請したのは、81年2月7日で、16週間職がなかったため、ポプラー救貧院に入所が認められた。10月に医療手当を受け、81年12月に、4カ月間仕事がなく、足がまだ悪かった

ので、シック・アサイラムに送られた。1882年6月にシック・アサイラムを出てフェニックス・アパートに戻った。83年1月に再び申請するが認められなかった。

83年7月4日に彼が来ていうことには、先の木曜日にドリスコールのパブで飲んだとき、彼は勘定として半ソヴリンを払おうとしたのだが、店員たちは何も請求せずに彼を殴り倒して監禁したという。彼はこの週は職についていないものの、1日18シリングを稼いでいた。これに対し、救済官がドリスコールの店に行き行って聞いてきたことには、ドノヴァンが酒に大金を使ったため、パブの主人が酒を出すのを止めたところ、彼は乱暴で口汚くなって、彼を抑えるのに警官が呼ばれたということだった。彼は監禁をされてはいなかった。ポプラー救貧院へ送るという指令がされた。

8月3日に再び入所を申請し、ポプラー救貧院に収容された。隣人達が彼を助けていたのだが、10日間働かなかったのである。83年12月13日、84年4月24日、6月19日、8月29日に、数日間外に出てから入所申請をしている。86年1月4日、彼は9ヶ月間自分で生計をたてた後に、再び入所している。86年6月に何日か外に出て、その年はその後シック・アサイラムにいた。シック・アサイラムから退院してから、ポプラー救貧院に送られ、現在にいたる。88年8月30日に救貧院から去るために衣服を要請するが却下される。(No. 308, pp. 490-191)

Henry Edwards (61歳、既婚、港湾労働者)は、飲酒と病気のためポプラー救貧院に入所。縫い子の妻(51歳)は、シック・アサイラム、プロムレイ救貧院、ポプラー救貧院にいたことがある。親戚としては、兄(弟)は死亡しているが、その妻がいる。

1885年1月1日、妻が医療救済を申し込んだ。彼女はずっと仕事がなかった。夫はミルウォール・ドックでウェイター(週21シリング)をしていたが、4年間、不定期に雇われるだけだった。

葉が与えられたが、4日後に夫の妻のシック・アサイラムへの入院を申請しに来た。リーニー夫人が彼らを補助した。彼は2週間で7シリングしか稼がなかった。救済官補佐が家を訪ねたところ、彼らはロンドン・ストリート31番地の家賃1シリング9ペンスの屋根裏部屋に住んでいた。カバーもなしに、とても汚らしく、ベッドが床に置いてあった。「男の方は汚い身なりの男」だった。女性の方はプロムレイ救貧院に送られた。

85年1月13日に男の方が申請をした。彼はおこりにかかっている、月曜日から4シリングしか稼いでなかった。ポプラー救貧院に送られた。

妻はプロムレイを3月30日に出て、夫がポプラーにいることを知った。彼女は再入所の申請をし、ポプラー救貧院に送られた。彼女が申請をしたとき、顔が傷だらけで切り傷があった。85年4月、再びそとにでるが、次の日にまた入所する。

86年10月28日、男の方が入所を申請した。彼は6か月の間2シリング6ペンスしか収入がなかったのである。以前には彼は週2シリング6ペンス稼いで生計を立てていたが、雇い主がインドに行ってしまったという。妻は自分で生計をたてようと努力していたが、男はポプラー救貧院に入所した。(no. 309, p. 492)

8. 結 論

以上の事例のみから統一的な結論を導くことは難しいが、『生活と労働』におけるブースの貧困観に関する論争に関連して次のようなことを述べることができる。

ブースは、職業毎の貧困者の率と救貧施設収容者の率を比較して、例外はあるものの、それらの多くに対応関係があると結論した。これは「貧困者の貧困は極貧者との競争の結果である」という労働収容所の考え方を間接的に裏付けるものでもある。また、アサイラム・データの事例から「窮乏環境の事例となる12の個人

史」がまとめられているが、これをデータの原資料と比較すると、夫婦・親子・兄弟で施設収容を余儀なくされる家族環境に特に力点を置いてまとめられている。

窮乏の原因についていえば、アサイラム・データでの救貧官の叙述から原因を1つまたは複数に特定するのにあたって、ブースの主観的な判断が働いたことは否定できない。しかし、その先入観はブラウンの主張したような貧困を個人の道徳に帰する貧困観ではなかった。彼は、能力不足や精神障害、怠惰、飲酒、怠惰などの道徳的な原因より、その背景にある老齢、失業、病氣、環境などを、窮乏の主要な原因として選

択したのである。

したがって、被救済的窮乏に関する『生活と労働』の調査とその統計は、資料の収集とその集計に関しては科学的な手法を用いているが、資料の分類とその分析視点については最近のブース研究が指摘する通り主観的な先入観が存在する。しかし、その主観的な先入観とは、不熟練労働者の性格に対する道徳的仮説というよりは、貧困は貧困者により労働市場と家族環境において再生産されると考える社会経済的仮説であり、労働収容所の発想もそうした貧困観から生まれたのである。

(慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程)